

【氏名】坂野 正則

【所属大学院】(助成決定時) 東京大学大学院 人文社会系研究科

【研究題目】

17 世紀フランスの海外宣教形成における国際的カトリック・ネットワークの活用に関する研究

【研究の目的】

申請者の研究課題を実施する目的は二つある。

第一は、海外宣教におけるフランス宣教団体の優位性の確立の過程を分析することである。17 世紀後半は、カトリック海外宣教の活動方針が明確に転換する時代である。この時期、ローマ教皇庁布教聖省は、自らの宣教戦略の担い手をスペイン・ポルトガルからフランスへと転換する。この転換の背景と意義を解明する。

国家単位での転換を解明する第一の目的と相補する形で検討が必要な問題が、17 世紀西ヨーロッパ世界で形成されつつあったカトリック信徒による国境や民族を超えた広域宗派ネットワークである。それゆえ、第二の研究目的は、この国際的連帯のフランス海外宣教事業への影響の解明である。この当時、フランスは、カトリックとプロテスタントの宗派的境域地域であると同時に、多数の離散カトリック信徒や聖職者の亡命地であった。それゆえ、非ヨーロッパ世界への宣教活動とブリテン諸島をはじめとする北西ヨーロッパ世界でのカトリック再征服運動は、同時並行で展開する。

この二つの問題関心が交差する部分が解明できれば、国際的宗派ネットワークを有機的に活用したフランス海外宣教事業が、教皇庁における優位性を確立することを可能にしたことの背景を探ることが可能である。

【研究の内容・方法】

申請者の研究課題は、広域的な人的ネットワークの解明ということで、主に書簡史料を用い、その史料収集が、本研究の中心である。書簡史料は、人脈を理解するのに有効であるばかりではなく、公的文書や公式報告者には述べられない私的な見解や微妙な立場などについて語っている場合もあり、申請者の研究課題には格好の分析素材を提供してくれる。そこで、17 世紀にフランスの海外宣教事業を牽引したパリ外国宣教会、ローマ教皇庁布教聖省、フランスへの亡命スコットランド人の三者の関係性に注目することから本研究を出発させた。2008 年 2 月にパリのフランス国立公文書館とパリ外国宣教会文書館で現地調査する機会を得た。

まず、フランス国立公文書館では、公証人文書や寄進記録の史料収集にあたり、ネットワークの下部構造を形成する社会関係や経済関係の全般的な状況を解明する史料を見出すことが出来た。次に、パリ外国宣教会文書館では、17 世紀中期から後期にかけて北西ヨーロッパの国際カトリック・ネットワークの結節点として重要な役割を果たしたローマ在住の亡命スコットランド聖職者ウィリアム・レズレに関係する書簡を網羅的に調査した。同時に、17 世紀後半から 18 世紀にかけてローマに滞在し教皇庁との交

渉を担当した複数のパリ外国宣教会聖職者の書簡に関しても調査することが出来た。

日本帰国後は、以前に収集した史料と今回新たに収集した史料とを有機的に連関させながら解明を進め、その研究成果の一部は、2008年5月に日本西洋史学会第58回大会で「17世紀フランスにおけるパリ外国宣教会の設立－亡命スコットランド人聖職者の書簡を中心に－」と題する研究報告で発表した。

#### 【結論・考察】

フランス海外宣教と国際的宗派連帯の関係を全体的に捉えることはできていないが、ウィリアム・レズレを中心としたパリ外国宣教会創立をめぐるネットワーク活用については、その全体像を解明することができた。

本研究で取り上げたウィリアム・レズレは、ローマ布教聖省とパリ外国宣教会を媒介し、その中でフランス王権やイエズス会との調整にも配慮を示しながら行動する。他方、亡命スコットランド人聖職者という立場から、特定の国家や宗教組織に帰属せず、汎ヨーロッパ的視点から宣教戦略を構想した。さらに、祖国を同じくするフランス在住のスコットランド人宣教師の養成にも強い関心を持って取り組み、広範な外国出身宣教師を育成するためにパリ外国宣教会へ宣教師の推薦を行う。それゆえ、レズレの存在は、17世紀後半におけるパリ外国宣教会の多面的性格を体現するものである。すなわちそれは、フランス篤信家運動、ローマ布教聖省、スコットランド・ディアスポラの三者が有機的に連関しているところに固有の特徴が見られる。そして、レズレが組織外部からパリ外国宣教会における枢要な役割を占めることにより、この宣教組織は、フランス・イタリア・北西ヨーロッパを結ぶカトリック人脈の結節点となった。